

駅

日原 正彦

春

おだやかな螺鈿の腹を見せて
雲たちがゆく

闇に汚れた地下列車があかるいホームへすべりこんでくる

その 真上の昼の空と都会の
通奏低音のように

ドアが あき

昨日からのいろいろな顔が降りてくる

明日へのさまざまな後頭部が乗りこんでゆく

吐いて そして吸って

人も 列車も

次の駅へ

終着駅はあるのだろうか

それはあるだろう

でも 地上に這い出た列車は そこで
闇をぶるぶると払い

最後の乗客を降ろしてから

さらに遠く

殻を脱ぎ捨てるようにして 青い空の
さらに 遠く遠くの

見えない終着駅をめざすのだろう

そこで 人びとの

拭い難い 最後の
降ろすため 夢を

短詩三篇

日原正彦

一花

むこうを向いている桔梗ばかりだ
じつと見ていると
顔を静かにたたまれてしまう

それが ある日
こちらを向いている一花があつたのだ

目が抱きつかれて
涙が出た

握手

ひよいとかたむいてきた 一本の
芒と 握手する

何か大いなる音楽が終わったばかりのような
午後の 風のなかで

空に 鍵盤の まぼろし
この 芒の 十一二本くらいある細い指が 秋の
ひかりと かげを
たたいていたんだな

捨てる

飛ぶときは 捨てる
何かを 捨てる
人は その 何かを知らない

鳥たちは とつくの昔に
捨て去っている